

被災地訪問から分かること

早稲田大学大学院社会科学研究所博士課程
阿部 倫子

はじめに

私自身は被災地を二度訪れている。最初は4月26日から28日にかけてで、カトリック系の団体、ヴィンセンシオ・パウロ会（以下、パウロ会）のメンバーと共に、宮城県仙台市と名取市を視察したものである。二度目は7月15日から18日にかけてで、岩手県釜石市の釜石教会に滞在し、ボランティア活動に従事した。本稿では、その時の体験を報告しつつ、現場を前にして理解できたこととその意義について述べていきたい。

宮城県仙台市若林区視察の報告

震災から2カ月弱、私たちはパウロ会仙台支部の方々と合流し、若林区と名取市の境目を視察した。

災害支援車両とすれちがいながら高速を走り、宮城県へと入って行く。瓦の落ちた屋根を覆う青いビニールシートがあちこちで目につきはじめるが、揺れによる損壊はそう大きくはない様であった。市内に入り、逆流が押し寄せたという名取川を渡って、パウロ会のAさんと合流した。

私たちをずっと案内してくれたのがこのAさんである。最初に彼女の家を訪問したが、幸いなことに大きな損害がなかったため（後の認定は『半々壊状態』）、全国の教区から支

援物資が送られる拠点となっていた。しかし、こうした支援物資はありがたい半面、トラブルの種にもなる。

例えば、こんな要望が物資と共に寄せられることがあると言う。「我々からの物資を受取った被災者の写真かメッセージを送ってほしい。そうでないと、支援に協力した人々を納得させられない」、「疑うわけではないが、一体どこにどれだけ配分したのか逐一詳細を教えてください」。現場は人手も足りない上に、迅速な行動を迫られている。組織の立場からすればこうした要望は正当に思うのだろうが、これでは誰のための支援活動なのか疑問が付される。

物資そのものが問題となる場合もある。明らかに古着、毛玉だらけの服や、箆笥のこやしを引っ張り出してきたような年代物、ひどい時には使われたストッキングまでまぎれ込んである。捨てるよりかは良いだろうというリサイクル的な発想なのか、あるいは動機は純粋な善意に基づいていたが、慌てすぎて冷静さを欠いてしまったのだろうか。冷静になれば、下着類すら不足する被災地で（新旧さておき）ストッキングが優先的な支援物資とは思わないであろう。

衣類以外にも、賞味期限切れや、そもそも期限表記すらない食品が送られてくることもあるが、当然そうしたものは配布対象から外される。また開封済みの包装に半分ほど残されたオムツ（余ったから差し上げるということらしい）など、扱いに困るものが八箱に一箱ぐらいの割合で混ざってくるという。こう

した礼節を欠いた行為を前にすると、仕分け作業によるストレスは相当なものであるに違いない。

その点、神戸の方々には感動したとAさんは言う。衣類は常に新品か丁寧に包装されたもので、ひとつひとつメッセージを添えて送ってきたそうだ。神戸は過去に大震災を経験しているから、痛みを共有する者のあたたかな心遣いなのだろう。

Aさんの自宅を出た後、我々は津波の被害を受けた沿岸部へと向かった。

盛り土状になった東部道路の下をくぐりぬけると、町中とは景観がまるで変わってしまう。トンネルを抜けた途端、まさにテレビで見たような被災地がそこに広がっていた。

この東部道路というのは、防波堤の機能を持たせるために盛り土構造に設計されているが、狙い通り、内陸への津波の進行を食い止めることができた。ただし町の半分は被害にあったため、そこを境目に、被害にあった住民と、そうではない住民とに町は二分されてしまった。当然、そこには感情的なしこりが生じているという。

被災にあった沿岸部は田んぼや畑が多いのだが、それが干ばつのようにひび割れた光景が延々と広がっていた。風が強い日で、つんとする潮のにおいに乗って、砂が顔にぶつかってくる。海岸まで数キロある場所にも関わらずだ。

さらに車で進んでいく。瓦礫の壁が道路にそって延々と続き、なぎたおされた防風林があちこちに横たわって、虚しく空に巨大な根

っこを張っている。老人ホームの施設後を通り過ぎた際、白いフェンスがねじ曲がっている様子が目についた。幸い中の人々は屋上に避難したというが、津波の威力をまざまざと見せつけられた思いだった。またそこからそう遠くない所には、孤立していた仙台空港と、最初に数百人の犠牲者が発見されたという場所があると聞いた。

一通り沿岸部を車で走った後、Aさんのご親戚の家に向かった。この沿岸部は裕福な家が多い地区で、そのご親戚の家をふくめ立派な家が多い。ただ、こうした人の中には、プライドが邪魔をして避難所への移動を拒む人もいると聞く。これは報道では知り得ないことであろう。

どの民家もほとんどが無人であった。多くの家は居間と庭を隔てる引き戸のガラスが破壊されており、外から家の中を見えなくするためか、大きなカーテンがかけられていた。人気のない町で、強風にあおられたカーテンが、薄暗い室内でたなびく様子は、何とも不気味な光景であった。Aさんのご親戚の家もそうであったが、どこも被害の跡が片づけられていない。行政が損害を認定するまで、手をつけてはならない為であった。

ところで私が所属する大学院のゼミで議論されたことの一つに、国外の悲惨な事件と今回の震災とでは日本人の態度に差があるのではないかという指摘があったが、それはナショナリスティックな感情に起因するというよりも、リアリティが遠近感に左右される為であろう。だから同じ日本であっても、東日本

と西日本では震災の受けとめ方について温度差があるのではないだろうか。私自身、被災地そのものを訪れたことと、特に家の中を見せて頂いたことで、遠近感にかなりの変化が生じたように思う。それは「東北地方」だとか「被災地」といった言葉で切り捨てられない、私たちの日常の延長線上で震災を捉えるような感覚である。

3月以降、被災地の様子が報じられつづけてきたが、とても直視することが出来なかったという人も多いだろう。ただ、我々の場合はテレビを消してしまえば悲惨な事実は遠のいてしまう。しかしここでは、その悲惨の跡が拭い難く残されていた。現場に入るということは、こうした悲惨に向き合うことを意味するのである。

被災地に向かうことの意味とは何か

ゼミでは、今度の大地震を議論するうえで、メディアを通じて得た情報やデータが頻繁に引用された。もちろん、客観性を維持しながら事象の分析を行うにはこうしたソースが必要不可欠であることは言うまでもない。しかし、災害への当事者性が強い者や、実際に目撃した者の証言は、数値化されたデータよりもうまく現実を描き出すこともある。

鈴木大拙は『日本文化と禅』の中で、知識をおおまかに三種に分類した。まず、伝聞や文書類を読むことで得る知識である。知識の大部分はこれに属するという。しかし本に書かれたことを一々確かめ尽くすことはできないため、人はそれを望むと望まないとに関わら

ず、そのまま取り入れざるを得ない。

次に、科学的知識である。観察や実験などのプロセスを経ているため、最初のものよりかは体験的な性質を持つと考えられる。そのことが科学的知識の信用度を高めている。

そして最後に、「直観的な理解の方法によって達せられるものである。」[鈴木 1940, p.16]

禅宗が重んじるのは、この直観的な知識である。そのため「不立文字」などと言って、抽象化された論理やロゴスをしりぞける。つまり、徹底的に「実体」に迫ろうとする態度である。

「禅は体験的であり、科学は非体験的である。非体験的なものは抽象的であり、個人的経験に対してはあまり関心を持たぬ。体験的なものはまったく個人に属し、その人の経験を背景としなくては意義を持たぬ。」[同, p.7]

震災以後、被災地以外の地域にも、多くの震災関連の情報があふれた。メディアを通して知り得ることも種々の統計も、確かに真実を伝えるものではある。しかし、それはあくまでメディア（媒体）を通じて知った知識であり、実体そのものではない。

今回私が現地を訪問したのは、この実体把握を重んじたためである。被災地の情景や粉塵、臭い、人々の生活などの実体を知らない以上、震災や復興を語る資格がないように思われたからだ。そして現場という実体を前にしたことで、先ほどの被災地との距離感が縮んだという話もそうだが、次のようなことも理解できたと言えるだろう。

まず分かりやすい例では、五感によってのみ感知できる事物である。鼻をつく塩のにおいや強風に乗って降りかかってくる砂や粉塵などは、視覚・聴覚メディアを通じては伝わってこないものである。

次に、人の生の感情と声である。例えば先に述べた、被害状況で二分されてしまった町の感情的なしこりなどが挙げられる。私たちは小学校の避難所を訪問したあとに仙台駅へと向かったが、計画停電で暗くなった関東地方から来た私のような者にも、仙台駅周辺はずっと明るく賑やかに映ったものだった。

人々は完全に普通の生活に戻っているようで、道すがら通った内陸部分もすっかり地震のことなど忘れていた風であった。たった今見てきたばかりの沿岸部や避難所の風景に比べ、同じ市内であることを思うと、引き裂かれた町の心情が分かる気がしたものである。

一方で、無事だったはずの内陸の人々の、不安で怯えたような表情も印象的であった。私たちを案内して下さった方々や、ある同行者の知人、威勢の良いかけ声で接客する有名牛タン店の店員や、伊達の城下町をおしゃれな格好で行きかう人々など、皆一様にそうであったようだが、一見日常をとりもどしたような表情のすぐ下に、強張った怯えの色が見受けられた。

震災そのもののダメージに加え、1 か月以上も強い余震の中で生活していた時期である。本来なら非日常的な感情であるはずの恐怖心や不安などが日常化してしまった表情なのかもしれない。食事を共にしていても、私たち

とまるで同じように談笑していた相手がふとこうした暗い表情を見せたりする。地元民とそうでない者との隔たりを実感させられたものである。

また仙台教区のSさんにもお話をうかがった。整然とした話ぶりながら、何かじつと堪えていた感情が吹き出していたかのように語気が荒かった。それは先に述べた支援物資にまつわるストレスや、行政の不備などに加え、震災そのものへのやり場のない怒りなどが表されていたのだろう。ルサンチマンのようなものもあったかもしれない。その時期のマスコミは、被災者を「忍耐強い」などと美化して封じ込めてしまうような傾向があった。

それはある程度事実ではあるが、しかし彼らが悲しみや怒りを感じていない訳ではなく、かえってそのような言い方をしたことが、彼らの本当の気持ちを表現できる場を狭めてしまった気がする。だから無言で耐えつづけざるを得なかった東北人の真情が目前で吐露されていくのを見ると、美化された報道のみでは被災地を理解し得ないのだと思い知らされた気がした。マスコミによって報道向けに濾過される前の実情を知る、という点で現地訪問は意義があると言える。

岩手県釜石市からの報告

7月15日、鎌倉市にある雪ノ下カトリック教会の支援活動の一環として、また鎌倉市からの資金援助なども得て、私たちは岩手県釜石市へボランティア活動に向かった。

ベースとなったカトリック釜石教会は比較

的規模の大きな教会であり、30人は収容できるため、仙台教区サポートセンターの管理下で支援拠点となっている。津波による浸水はあったそうだが、致命的なものではなかった。

(ただし、併設してある駐車場には御遺体が流れ着いたそうである。)水道や電気などのライフラインは整っており、風呂は近所の銭湯を借りる。不便なことといえば、寝具がないため寝袋で雑魚寝をすることぐらいだろうか。それから食事はシスターが作ってくれるのだが、たかってくるハエの多さには大分辟易させられた。

被災地状況を目の当たりにしたのは、ボランティア先へ移動する途上であった。まず、町中の道路の信号がほとんど機能していない。商店街のシャッターや窓ガラスが原形をとどめぬほど破壊されている。車が通っていないければ、ゴーストタウンのようである。さらに住宅地や小学校の方に向かうと、予想以上の瓦礫の多さに驚かされた。以前視察した若林区の沿岸部とは異なり、こちらは人家が密集しているため、瓦礫の多さも尋常ではない。

火災の跡もあちこちに残っている。4か月も経過したとは思いがたい状況であったが、これでも自衛隊が一週間前にかなり瓦礫の撤去作業を進めたというから、少しは進展があったと言えるのだろう。復興の遅れの原因は、政治の不備により自治体に予算が回らないことや、人手不足、そもそも瓦礫の収容先が決まらないことなどが挙げられるだろう。

最初のボランティアでは、写真やアルバムなどの洗浄作業を行った。自衛隊の駐留する

近くの相撲場に、青いビニールシートのかけられた遺留品が置いてある。泥まみれのランドセルなどもあったが、今回私たちが担当するのは写真類だけだ。そこを仕切っていたのは、パレスチナを支援する NGO であった。今回は東北支援に回ったのだと言う。他の団体のボランティアも交え、作業に入る。

4か月たってはいるにも関わらず、アルバムにはまだ水が入り込んでいる。写真は数枚が石のように固まってしまっているが、水にふやかせば引き剥がすことができた。ただしインクがにじんでまったく判別できないものや、白くなっている物も少なくない。

ぬぐった土の下から表れるのは、子供の入学式や、結婚式、家族旅行や、社員旅行、学園祭、地元の虎踊りの風景などであった。どこの家族にも思い当たるような、ありふれた生活風景である。写真に写っている人々は津波の被害にあったと思われるが、今どこでどうしているのだろうか。作業中に写真を見に来た家族連れがいたが、その人たちのようにどこかの家に避難出来ているのだろうか。そんなことを考えさせられる作業であった。

しかし遺留品の整理とは、粉塵にまみれこそすれ決して労力のいる作業ではない。地味であり、全体的な復興の地図から見れば優先順位が高いようには見えないかもしれない。しかし取り仕切っていた NGO の男性によれば、中には涙をみせながらアルバムを抱えて帰る人もいるという。ボランティアが行う仕事は様々だが、この作業は最も価値のある仕事と言えるのかもしれない。

次のボランティア先は、山奥にある集会所で食事を作ることであった。この週に一度のボランティアによる炊き出しが、避難所の人にとっての楽しみだという。問題は調理のスキルがあること、集会所にある食料品をなるべく使うこと、ただし行ってみないと何の食材があるか分からないということと、「カレーとポテトサラダは飽きた」ということ、山奥のため買い出しには行けないということだった。プレッシャーのかかる仕事であるが、私を含め3名で向かう。

配膳は昼食が19名分、夕食が20名分である。問題の材料だが、原発の影響のためか葉野菜がなかった。じゃがいも、にんじんなど食材に偏りがある他、肉類は私たちが持ち込んだものしかない。取り敢えず、昼食にはジャーマンポテト、スペイン風オムレツ、大根を生姜汁と醤油に漬けたものと、サラダを用意した。片付けながら夕食の準備に入るが、おじいさんたちが空のお皿を持って片付けに来てくれたり、奥さんたちが「次は何を作ってくれるの？」と尋ねてきたり、子供が台所をのぞき込んで来るなど、合間に交流があり、自分たちが役に立っているようで嬉しくもあった。

すっかり力を得て、夕食は、ラム肉のトマトシチュー、それから山ほどあったキュウリで薬味たっぷりの棒棒鶏と、桃とサクランボを添えたミルクゼリーを作った。夕食までは一緒にできなかったが、3人の力作を喜んでいただければと思ったものだ。

帰る途中のことである。車を運転していた

カリタスジャパンのスタッフが車を止めて、ある集落を見下ろせる高台に案内してくれた。私たち以外にも数人いたが、皆は決壊した巨大な堤防を溜息まじりに見ている。集落到広がる瓦礫の山や崩れおちた巨大な堤防の様子は、津波の凄まじさを強く思わせる。それとともに、湖のように凪いだ海や美しい山々とは、非常に対極的でもあった。

「ほら、すぐその崖。仏さんが泣いてるよ」と、隣にいた地元の人らしき男性が、連れの男性に話しかけていた。指さす方を見たら、私たちのすぐ斜め手前の崖に、墓石が並んでいた。仏さんが泣いている、と男性はもう一度繰り返した。印象的なその言葉とともに、とてつもない自然災害であったということを実感させられる場面であった。

この数日間で私たちの行った作業は、復興への長い道のりの中ではごくごく小さなものでしかない。微力は無力ではない、と信じての参加であったが、この圧倒的な破壊の前ではやはり微力は微力でしかない。だがその微力を積み重ねる以外に、目的の達成がありえないことも事実である。支援は長期的に必要なになるであろうし、皆ができる事は多くのこされているのだ。

ボランティアの課題と必要性

「ただ『がんばれ』と言われても困る」と、仙台市で出会った人々は言っていた。仕事もなく、家もなく、ただでさえ手いっぱいにも関わらず、これ以上何をがんばれというのか分からないという。確かに、被災地にかかげら

れていた「がんばっぺ東北」という横断幕は、実生活を背負った重みと切実さを感じさせられたものだ。一方で、震災以降都心に氾濫した「がんばれ日本」という抽象的なスローガンは、果たして地に足のついたものであったろうか。一体だれに向けて、どのように「がんばれ」と呼びかけていたのだろうか。抽象的で実行力のないメッセージは、時として被害の当事者へマイナスの印象を与えてしまうようだ。

メッセージの有効性はさておき、このことは少なくとも私たちが意識上、あるいはトランスパーソナル的な集合無意識上で危機感を共有していることを示している。共同体のレベルが東北であれ日本であれ、震災が連帯の感情を呼び起こしているのである。それが具体的な行動へと繋がった時こそ、ボランティア精神が発揮されるのだ。社会的危機への切迫感から芽生えたボランティア精神は、人々に共同体体験をさせ、新しい癒しをもたらすことだろう。

しかし、崇高なボランティア精神にもとづいた人々の集う現場であっても、何の問題もないというわけではない。

まず、被災者の需要に適合しない慈善行為の問題はよく問題となる。たとえば芸能人の炊き出し風景がよく報道されたが、現地の人はどこか冷めた目でそれを見ていたと聞いた。1 か月は経過していた頃だから、食糧事情は比較的安定していたし、切迫した需要は他にいくらかもあった。

おまけに、テレビをひきつれ華々しく活躍

してみせた芸能人たちは、数日後には帰ってしまう存在で、その支援活動も一過性のものである。つまり、現地の声を反映していない一方向性、そして一過性と、メディアの取り扱いなどから、パフォーマンスが先行しているような印象を与えてしまったのだろう。また被災者たちは、報道されない裏で黙々と長期的な支援を行っている芸能人やスポーツ選手の存在を知っている。騒々しいだけの支援パフォーマンスは表に出やすいが、現地の需要とかみ合わなければただのお祭り騒ぎでしかない。ボランティア文化の未熟さを露呈するだけだ。

同じような問題をかかえる例として、Aさんに窺った仙台市の話もある。あるインド系の新興宗教を奉じる団体が炊き出しを行ったのだが、非常に信心深い人達だったためか、肉類を一切絶った純ベジタリアンカーリーを被災地でふるまい続けたという。我々を含めて言えることだが、ただでさえ宗教団体の支援活動は日本では警戒されやすい。支援とひきかえに勧誘されるのではないかと敬遠されるためだ。このカーリーの団体はそうした相手の気持ちも考慮に入れなかった上、被災地の人々の効用（栄養状態や幸福）よりも自分たちの教義を優先順位に置いていたようだ。

以上の例に共通して言えることは、本当に優先されるべきことは自分たちの善意や信条ではなく、その行為の受け手の効用であるということだ。我々は常にそこに立ち返って支援を行う必要がある。本来の目的を常に確認し、最適な行動をとることが必要なのだ。

そして最適な行動を行うには、復興の地域格差を理解し、被災地の状況が刻々と変化しているのだという認識に基づく必要がある。我々がボランティアに入った際にも、どのような作業が託される当日まで分らなかった。「服がないだろう」とか「食糧がないだろう」といった当て推量や先入観は、何の役にも立たないのである。足下のニーズを知る方法としては、現場を統括する組織と連絡を取る、あるいはソーシャルネットワークで直接被災者の声を拾うことなどが考えられるだろう。

二番目の問題は、あまりに多様なボランティアが被災地に集結しているということだ。もちろん、みんな今回の出来ごとに心動かされ、何とか被災地を復興させたいと願う人々ばかりであることは言うまでもない。老若を問わず、善男善女、あらゆる分野の人々が集っており、ボランティア精神が日本人に根付いた証であるように思えた。しかし多様すぎる「人種」が集まる現場であるということが、共同作業に支障をきたす場合もあるらしい。

釜石教会では、毎夕食後にミーティングを設けて活動の報告をする。その中で、ボランティア先での人間関係について悩みをかかえて帰ってくる人が数名いた。自衛隊のように組織だった指揮系統がないためか、方法論や指示を出す立場をめぐって問題が生じてしまうらしい。個人的な人間関係の問題かもしれないが、実際、雑多な人々で構成されている現場を見る限り、彼らを上手くマネジメントする存在は必要であろう。

カギとなるのは、やはり行政の存在感だ。

そもそも市民セクターは行政を補完する役割を担い、行政はその市民セクターを支えるという連携関係にある。特に人手不足や資金不足で行政機関が対応しきれない状況において、市民が果たせる役割は大きいはずだ。

しかし、被災地の人々の「真の需要」に応えることは、非常に難しい。なぜなら彼らが欲するのは、仕事、家、日常生活以外の何もでもないからだ。テレビの向こうの人は一方的にがんばれと言い、メディアは芸能人たちの華々しい活動を取り上げる。だがそうした人々は仕事をくれるわけでもなく家を建ててくれるわけでもない。震災から1か月前後の時点で私が見聞きした限り、こうした不満や反発は少なくなかったのである。

こうした根本的な問題に対しては多くの人が無力感を感じるかもしれない。ただでさえ迷惑を考えて支援に行くのを躊躇する人は少なくない。つまり何かしらの地位や資金力、スキルのある人が現地に行くべきで、自分が無力であると思いついてしまうのである。

しかし数か月たった現在、ボランティアに要求される作業は多様化している。瓦礫撤去は若い男性だけの仕事ではないし、遺留品の整理に体力はいらない。避難所での料理づくりのように日常の延長のような活動もあるし、陸前高田の縁日を手伝ったメンバーもいた。何かしたいという自発性が芽生えたならば、それを握りつぶしてしまってもったいない話である。迷惑だろうかなどと遠慮せず、とにかく現地に足を運んでみることだ。

もちろん、被災地の復興を軌道にのせるに

は、現地の市場機能を回復させることが第一である。そうしなければ仕事もなく、家も建てられないのだから。だがそこに辿りつくまでは、各個人が小さな力を出し合い、それを積み重ねることが絶対的に必要である。また将来的に市場機能が回復したとしても、そのシステムからこぼれおちる人々が出てくることも考えられるが、彼らを支えるのは民間と行政の役割である。つまりボランティア活動は、今最も必要なものであると同時に、将来にわたって長期的に必要とされるものであると言える。

<引用・参考文献>

鈴木大拙 『禅と日本文化』・岩波新書, 1940.

学生たちの不思議な力 一被災地で生かされた 「鎌倉てらこや」の経験

NPO 法人「鎌倉てらこや」副理事長
池田 季実子

会津若松での学生たちの活躍

2011年4月12日～13日の2日間、池田雅之（鎌倉てらこや理事長）、上江洲慎（同事務局長）、池田季実子（同副理事長）の3人が東北被災地へ、打ち合わせと視察を兼ねて行ってきましたので、報告させていただきます。

訪問先は、会津若松市（福島県）、北上市（岩手県）、釜石市（岩手県）、大槌町（岩手県）の4か所で、往復1,300kmの行程でした。「全

国てらこやネットワーク」（以下「てらネット」と略す）前理事長・湯沢大地さん、理事長・大西克幸さんも加わって、計5人で出かけました。「鎌倉てらこや」事務局長の上江洲慎君は、「てらネット」の理事でもあり、この間2つの組織のつなぎ役となってくれました。

はじめの訪問先は、会津若松市。ここに、福島原発から10kmに位置する原発被災地・大熊町が町をあげて避難してきています。会津若松市役所内に開設された大熊町役場は、すでに業務を開始しており、4月19日には小学校、中学校が開校し、子どもたち約600名が移転してくるようになっていきます。

私たちは、大熊町役場の教育総務課長に面会し、「小学校が開校になった時、もしご希望であれば、鎌倉てらこやの学生が子どもたちの勉強や遊びの相手、お世話をすることができますが、いかがでしょうか？」と、提案したところ、「今は、混乱状態でそこまで手がまわらないですが、すぐに必要になってくると思います。その時は、学生さんが来てくれると大変ありがたいです。ぜひよろしくお願います」というお返事でした。

会津若松の青年会議所の方にも会いました。このプロジェクトは、「てらこや」の学生だけでは不十分なのではないか、という話になった時、青年会議所の青年が、「自分は会津大学にルートがあるので、話をもちかけてみる」ということになりました。それが実現すれば、支援ネットは、一段と広がることになります。

大熊町の人たちは、震災直後は、福島県・田村市に集団避難していました。この田村市

に大西理事長のネットワークがあり、その関係で上江洲君達が、支援物資をもって田村市の避難所に入ることができました。その後、上江洲君と学生（池田ゼミ3年生）の岩沢圭一郎君の2人が、避難所で生活を共にしながら、避難所の子どもたちのケアをしていました。ケアといっても、そこでしていたことは、日頃、「鎌倉てらこや」でやっていたことと全く同じ事でした。つまり、おんぶ、だっこ、肩車などで、その他遊びに関しては何でもやったそうです。しかし、午前、午後2時間ずつ勉強もしっかりやりました。子供達に求められるままに、おもいっきり遊び、一生懸命学ぶ。学生の持っている「不思議な力」が、子どもたちのありのままの姿を引き出し、子どもたちの命の躍動を導き出したのです。

上江洲君と岩沢君は、避難してきた子どもたちから、受け入れられ、求められ、絆がだんだん強くなっていくのを感じたそうです。こうした体験は、この9年間、「鎌倉てらこや」に参加した学生たちの誰もが経験してきたことでもあります。2人は、ここで必要とされ、大きな力になっていることを確信したのです。こうした姿が親御さんたちや市の職員の方々の目に映り、彼らからも信頼を得るようになりました。そうした経緯があり、私達大人も、今回の会津若松行きへとつながり、観迎して頂けたのでした。

ここ会津若松は、学生の岩沢圭一郎君の実家がある所です。彼は活動中実家に戻り、一人で毎日避難所に通ってくれました。「今、大学生の力は子どもたちに強く求められてい

る」と彼は言っていました。これから早急にやるべきことは、学生たちを会津若松に派遣する体制を作ることと、資金面での保証をとることでしょう。

また、会津若松での学生の宿泊場所として、岩沢君のお母様をご自宅を開放して下さることになりました。とても明るい方で、私たちの活動に積極的に協力してくださいました。

北上市から釜石市・大槌町へ

次に私たちは、一路北上し、岩手県の北上市を訪ねました。以前から北上市の青年会議所の多くの方々との交流がありました。とりわけ、数年前から「北上てらこや」活動を実践している伊藤さんと菊池さんという若い2人との話し合いでは、支援活動上の具体的な進展が見られました。彼らは、今後津波被害の大きかった釜石市への支援を、私たち「鎌倉てらこや」や、「てらネット」の若い人たちと手を組んでやっていきたいとのことでした。

北上市の方々との打ち合わせの後、私たちは釜石市と大槌町へと向かいました。釜石市は、復興の目途はまだたっておらず、支援ボランティアの受け入れなどの、マッチングゴ



北上青年会議所の皆さんとともに

ーディネート（被災者側のニーズと支援者の意欲）がきちんと確立していない現状でした。その機能を伊藤さんと菊池さんらが中心になって、北上市にその拠点をつくっているとのことでした。

具体的には、北上市に学生の宿泊・食事などの受け入れ体制を作り、釜石市のボランティア受け入れ責任者との交渉窓口を、伊藤さん菊池さんの2人が担い、うまく両者をマッチングさせます。また、北上市と釜石市間の学生の移動も、彼ら2人を中心にして、北上青年会議所の有志のサポートによって行います。つまり、機能不全にある釜石市には負担をかけず、的確に支援していける現実的なプランを提示するということです。釜石市側（ボランティア受け入れ責任者）も、こちらの子ども支援の申し出を歓迎してくれました。

伊藤さんと菊池さんは、優しくて行動が迅速でした。また、東北人特有の温かい人間味を感じました。伊藤さんは、宮沢賢治の子孫で、お父様が北上市の市長さんだそうです。伊藤さんが管理している50人収容できる賄いつきの建物があるとのことでしたので、今後、そこを学生たちの宿泊所に提供したいと言ってくださいました。

「鎌倉てらこや」の支援活動の特徴

次の目的地は、釜石市と大槌町でした。北上市から東へ車で2時間ほど、内陸部から沿岸部へと車を走らせました。途中、私たちの車は、「遠野物語」で有名な遠野の山間をしばらく走りましたが、遠野の山々は春まだ浅く、

冬木立のままの姿でした。それでも、若葉の気配を内に秘めた山々は、ほのかにけむっているように見えました。その山並みのグラデーションが目を見張るほど美しく、緑の平地には川が流れ、桃源郷のようでした。宮沢賢治の文学の世界は、まさに、こうした自然から生まれたものかも知れないと思いました。

車は平野部にいたり、人家を抜け、また山を越えると、そこは釜石市。風景は一変し、ボランティアセンターに到着しました。自衛隊、テント、物資の山、強い風が吹く中、人々が忙しげに立ち働いていました。それから、いよいよ町の中心部に向かいました。かつてここは、商店街だったと分かる以外は、がれきの山また山でした。

次に大槌町に向かいました。ここはさらにひどく、行けども行けどもがれきの山だらけでした。がれきだけの中を丁寧に少しずつつがれきをより分けているシャベルカーが2台、黙々と歩く老人、2人一組になって、手作業でがれきを撤去している自衛隊員の姿が、ポツリポツリと見えました。強風の音以外、何も聞こえません。この非現実的な静かさは、瘴気しょうきただよう死の町のようなようでした。文明が反転した、がれきの山の惨めさと、あの遠野の自然の美しさとのあまりの乖離に、私たちは、呆然としてしまいました。

今回、私たちが現地入りできたのは、「てらネット」の持っているネットワーク力と、「鎌倉てらこや」の持っている「学生たちの不思議な力」による創造的な2つの力が結びついたからです。政府や行政のラインではなく、

私たち民間レベルのつながりによって、「フェイス トゥ フェイス」の信頼関係の下で実践していけるところに、私たちの支援活動の特徴があるといえます。(2011年4月16日記)

「サンタプロジェクト」に参加して

早稲田大学社会科学部3年 岩沢 圭一郎

フィンランド政府公認の本物のサンタクロースとともに被災地を訪れるサンタプロジェクト。このプロジェクトのためにサンタだけでなく、フィンランドの民族楽器カンテレの奏者や、サンタの住む町・ロヴァニエミのベルカント合唱団が来日し、日本の学生やフィンランドの留学生と共に被災地を訪れた。

12月6日から9日までの4日間、被災地の幼稚園や施設で音楽を奏で、歌い、絵本を朗読し、サンタクロースと共にプレゼントを手渡した。岩手・宮城では幼稚園の子供たちに、千葉では福島から避難してきている知的障害者の方々に、少し早いクリスマスを届けてきた。

このプロジェクトの発起人は関東学院大学の伊藤玄二郎教授。伊藤教授はこのプロジェクトをやるにあたり他大学の巻き込みを考えていた。そこで、親交のある池田雅之教授に話が来て、ゼミ生の私と小木曾駿はこのプロジェクトに参加させて頂く事になった。関東学院大学、早稲田大学以外にも、鶴見大学、城西国際大学、そして東京外国語大学からフ

インランド人留学生が参加した。

12月6日、10時間かけて日本に到着したベルカント合唱団とカンテレ奏者ヘイッキさんは空港から早稲田大学に向かい、私達は大隈講堂で団結式を行った。この日はフィンランドの独立記念日、そんな特別な日にこのプロジェクトはスタートしたのだった。この日の宿は岩手県北上市にあるため、団結式の後バスで8時間かけて移動した。このプロジェクト中、長い移動時間が多かったため合唱団やヘイッキさん達は大変に疲れたと思うが、彼らは嫌な顔一つせずプロジェクトに参加してくれた。その寛容さに私は深く感謝したい。

北上のホテルに着いてから、学生は朗読組と、子供たちに渡すプレゼントの詰め作業組に別れ、準備をした。翌日訪問する幼稚園には250名の園児がいるため、プレゼント量もなかなか多い。初めて顔を合わせる学生が多かったが、協力して早く準備を終わらせる事ができた。

12月7日、この日は岩手県釜石市にある甲東幼稚園に向かった。プロジェクト最初の会場であるためか、学生達に少し緊張が見られた。というより被災地に初めて行く学生が多く、子供たちとどの様に接したら良いか考えているようだった。しかし、そんな緊張顔も、幼稚園に着くとパッと笑顔に変わった。子供たちがとても元気に学生に話しかけてくれたためだ。そんな子供たちの姿をみて私達は、「素敵なクリスマス会をこの子たちに届けたい」、そう強く思った。

クリスマス会は、フィンランドの民族楽器

カンテレの演奏から始まった。カンテレはギターのネックの部分だけの様な楽器で、その小さな楽器から奏でられる音色は繊細でとても美しい。また奏者のヘイッキの人柄のおかげで、子供たちはすっかり演奏に聞き入り、会場からはカンテレの優しい音色だけが聞こえてきた。この演奏とともにスクリーンにフィンランドの写真も流したのだが、オーロラや雪の中にいるトナカイなど、写真が変わるたびに子供たちはフィンランドの風景に夢中になっていた。

それから朗読と合唱を終えクリスマス会も終わりに近づいた頃、司会の学生が子供たちに呼びかけた。「もし、みんなが大きな声で呼んだら、サンタさんがフィンランドから、来てくれるかもしれない！みんなで呼んでみようよ！」。子供たちは目をキラキラさせ、大きな大きな声で呼んだ「サンタさーん！！」。すると前から大きな袋を持ったサンタさんが登場してきた。大きな体で、真っ白いヒゲをはやした本物のサンタさんを見て、子供たちは大興奮。一人一人、プレゼントをサンタさんから受け取って、満面の笑みを浮かべていた。



フィンランドから来た本物のサンタクロースと子どもたち

その後私達は、伊藤教授のゼミのOBで現在は釜石の地元ラグビーチームのキャプテンをしている佐伯さんの案内で、津波の被害を受けた釜石市と大槌町を見てきた。瓦礫の山が津波の被害の大きさを物語る。しかし街があったところに行くと、街がポツカリと消えていて実感がわからない。家の基礎の部分を見て、「あっ、ここに家があったのか」とようやく街並の様子がイメージできる。そして恐ろしさがこみ上げてくる。私達は言葉を失っていた。

その後、私達は津波の被害を受けたが、営業を再開した食事処に行き昼食をとった。その女将さんがこう言っていた。「助けてもらってばかりではダメで、自分達が努力しなければ何も変わらない事が分かりました。だから私たちは自分達で復興させるために頑張ります。でも力が足りません、どうか助けて下さい。ここで自分達が見たもの、感じたことを、帰ったらどうか家族や友人に伝えて下さい。そしてぜひまた来てください。お待ちしております。」その言葉は私達の心に強く残った。前を向き歩き出している姿に、私は感動した。

12月8日、この日は午前中に宮城県名取市にあるふたば幼稚園へ。ここは園児が500人もいる大きな幼稚園だ。ここでも昨日と同じようにカンテレ、朗読、合唱、サンタさん登場の順番でクリスマス会が行われた。朗読で学生達が読み聞かせている絵本は「フィンランドの森」というもの。この「フィンランドの森」は作家の三木卓さんとフィンランドの画家ヴィヴィ・ケツバイネンさんによって、

このプロジェクトのために書き下ろされた絵本である。学生は関東学院大学、鶴見大学、城西国際大学とバラバラであるが、お互い予定を合せながらその絵本を何週間も前から練習し、本番に臨んでいた。私もその素敵な朗読に、子供たちと一緒に聞いてしまった。

午後は仙台市にある東北福祉大学へと向かう。東北福祉大学では800人入るホールに付属の幼稚園生が300人、そして大学生も400人ほど入っていた。サンタクロースが登場した時は子供たちだけでなく、保護者や大学生からも自然と笑顔が溢れ、サンタクロースは本当に全ての人々から愛されているんだな、と改めて思った。

12月9日、この日は千葉県鴨川市の青年の家に向かった。ここには、福島県富岡町から知的障害者の方々から子供からお年寄りまで約300人が避難してきている。富岡町は福島第二原発のある町で、ほとんどの家が第二原発までは、約10km圏内である。富岡町のすぐ上に大熊町があり、第一原発までも約20km圏内、そんな環境の町だ。ここでも、これまで同様の流れでクリスマス会が行われた。カンテレ、朗読、そしてベルカント合唱団によってクリスマスソングなどが唄われた。ベルカント合唱団は4人ずつ8人の男女から成る団で、フィンランドでは普段は教師や警察官として働いている人たちだ。その歌声は、カンテレのようにとっても澄んでいて美しい。しかも、その迫力のある音量に私達はすっかりその世界に吸い込まれてしまった。

私はこのプロジェクトの話を聞いたとき、とてもワクワクした。「本物のサンタクロースが来るなんて素敵だ、これは被災地の方々に夢や希望、元気を届けられるんじゃないか」と。しかし、ふと疑問にも思った。「“本物のサンタクロース”がいるという事は、“偽物のサンタクロース”もいるのだろうか？」いや、偽物のサンタクロースなんていない。

私の好きな言葉にこんなものがある。「誰もが誰かのサンタクロース」。その言葉の通り、私達は、誰もが誰かに夢や感動、元気を届けられる存在なのだと思う。実際に私達は被災地で子供たちからたくさんの元気をもらったし、町の人々や女将さんの姿に感動した。同じように私達もこの活動を通して被災地の方々に何か届けられたら良いと考えている。そんな一方的じゃない双方向的なアプローチ。皆がサンタになって、周りの人々に幸せを分けられたら、こんなに素敵なことはない。このプロジェクトは、そんな大切な気持ちを教えてくれる素晴らしいプロジェクトだと感じた。



サンタプロジェクトの解団式(東京・有楽町にて)

「鎌倉てらこや」復興支援活動 レポート—福島県大熊町の子ど もたちとの共同生活

NPO 法人鎌倉てらこや事務局長
NPO 法人全国てらこやネットワーク専務理事
上江洲 慎

本レポートは、筆者が2011年3月下旬から4月上旬にかけて行った活動内容の紹介と感想である。当時の様子をそのままの形で記録に残したい、との考えから、執筆した4月上旬のものに加筆、修正することはあえて控えた。当然、現地の状況も子どもたちの様子も変化しているが、大切なことはほとんど変わっていない、と感じている。震災直後の“空気感”を思い出しながら、読んで頂けると幸いである。

活動概要について

福島県田村市旧春山小学校へのスタッフ・学生ボランティア派遣

2011年3月28日～4月2日

<目的>

- ・不足物資の提供
- ・避難所にいる子どもたちの勉強をサポートし、遊び相手をしながら、心身の健康への寄与
- ・中長期的支援に向けた、ニーズの把握

<主な活動内容>

- ・避難者と寝食を共にする「共同生活」スタ

イル

- ・遊び（おんぶ、だっこ、肩車、キック、パンチ、サッカー、キャッチボール、ブランコ）
- ・勉強のサポート（個別指導、採点）
- ・語り（大熊町職員、町議会議員、消防団員、町民）

<物資の提供>

現場への事前のヒアリングで提示された、「野菜ジュース」300名×2回分、電気アシスト自転車1台、口内炎塗り薬を提供しました。

<子どもたちのケア>

日頃の「てらこや」活動で行っていることを、現地でも実践してきました。学生ボランティアが子どもたちのお兄さんお姉さん役として、勉強のサポートをしたり、一緒に思いっきり遊んだりしました。

<勉強の環境>

田村市教育委員会の協力によって『学習室』が設置されていました。田村市内にある避難所には全て学習室が設置されており、午前10時～11時45分（45分×2コマ）の時間帯を学習タイムとしていました。

春山小学校では、これに加え、午後13時30分～15時の間も学習タイムとして設けられていました。教材（学年、教科ごとに分けられている）と、鉛筆、消しゴム、ノートなどは、田村市教育委員会が特別に用意してくれていました。また、東京都足立区からも多くの教材が支援物資として届けられており、

それも大切に使われていました。教室には、中学生4名、小学生8名が通ってきました。

<食事>

- ・避難者の皆さんと同じ食事を頂きました。
- ・主なメニューは以下の通りです。
- ・朝食：菓子パン一個と飲み物約 200ml (牛乳など)
- ・昼食：菓子パン一個と飲み物約 200ml
- ・夕食：ごはん、うめぼし、たくあん、みそ汁

<健康管理>

「本日病院行きを希望される方は、朝9時に玄関前に集合してください」「健康相談がある方は、午後3時に〇〇前にいらして下さい」「血圧を測りたい方は〇〇時に〇〇に来て下さい」と町の職員が館内放送でアナウンスをするなど、定期的な健康管理がなされていました。

大熊町の皆さんへのインタビューを行う

共同生活の期間中、老若男女問わず、多くの方々に話を伺うことができました。その一部を紹介します。

Q「やっぱり、早く大熊町に戻りたいんですか？」

A「それは、もちろん。早く原発関係が落ち着いて欲しい」
(40代男性)

A「戻りたいけど、水道とか、土壌とかの安全が確保されない不安で、戻れないですよ」(50代女性)

A「いつ頃なら戻れるのか、見通しが欲しい。そうでない

と、職探しができない」(20代男性)

Q「関東や関西、九州など、多くの地域、自治体、企業が住宅などを準備して、皆さんを受け入れようとしていると思います。どんな所なら、行ってみたいと思いますか？」

A「住む場所があっても仕事がなければ暮らしていけない。家賃は無料でも、高熱水費はかかる。収入がなければじり貧になるのが目に見えている。震災直後、荷物をまとめる時間も与えられずに避難してきた。身の回りのものや財産になるものも置いてきたまま戻れなくなってしまったからね。」(40代男性)

A「子どもたちの学校のことが気になりますからね...」(40代女性)

A「大熊のことが気になるから、親族のいる県外に避難しないで、残っている。なるべくなら、役場や町の皆と近くで生活して、様子をみたい」(50代女性)

A「当面の仕事があって、大熊町で暮らせるようになった時、自由に戻ることが許される状況が用意されるなら、行くかも」(20代男性)

話を伺って分かったことは、相手の立場に立って考えれば当然のことでしたが、聞くまでは意外と気づいていませんでした。

全体的に、皆さんが元の生活に戻りたいと思っているということ、他地域へ移動するならば、「雇用」「教育環境」「住環境」が保障されることが最低限必要で、それでも尚、心理的障壁が残るということが分かりました。そして、今一番不安なのは、「大熊に戻る可能性があるのか?」「戻れるとしたら、時期はいつ頃になるのか?」「その間の生活はどの程度保障されるのか?」といった疑問のように、先

の見通しが全く見えないことであると言います。もちろん、保障に頼る気持ちだけでなく、自分の稼ぎをどうするか？個人個人がしっかり考えてもいました。

但し、問題が複雑なのは、この件には原発問題が絡んでいるということです。私が滞在中、ある消防団員が、「今、会社から連絡があって次の現場を伝えられた。IF（福島第一原発）ということだった。正直、この仕事を受けられるかどうか悩んでいる」と話をしてくれました。話を聞いて、何かしらの力になりたいと思えば思うほど、首都圏の電力を他地域に設置された発電所に頼っているという「エネルギー問題」や、それに付随した「雇用問題」など、社会全体の構造から問題解決に向けたアプローチをすることが不可欠であると気づかされました。そこでは、解決できない問題が現地の方に鋭く突きつけられていると思いました。

大熊町の皆さんから学んだこと

私たちが訪れた福島県田村市旧春山小学校では、原発所在地である大熊町の皆さん（約300名）が避難生活を送っていました。その様子を見て、語弊があるといけませんが、「いい避難所だな」と感じました。それは避難所生活のあらゆる所に「自助」と「共助」が見られたからです。避難所の運営は基本的に大熊町の職員6、7名と、約10名の消防団員が中心となって行われていました。

また、避難者も班分けがされており、毎日夕方頃に班長会議が行われて、町の災害対策

本部からの情報伝達や、町民から本部への要望が伝えられる機会が設けられていました。避難所の掃除や炊事も班ごとに当番制で行われていました。しかもそれも、町の職員が班に指示をするのではなく、町民自らの発意と調整によって行われている、とのことでした。毎朝6時半からラジオ体操が行われていましたが、これも町民自らの意思によって実施しているとのことでした。町の職員と町民をつなぐ存在として「消防団」の役割も大きかったように思います。

食料の配給や物資の分配などは消防団の手によってなされており、彼らへの信頼感から不平不満がでにくい構造になっていました。避難所の責任者（町の課長）いわく「この皆は、自分の意思で動けるたくましい人たちです」とのことでした。ただ、最初の数日は混乱していたようで、それをどうにかしようと、皆で協力してこのような体制を整えた、という経緯があったようです。

共同生活から見えてくるもの

そんなこんなで、避難所のオペレーションが比較的うまくいっていたので、私たちがいなければ、避難所の生活が成り立たない、という状況ではありませんでした。退去者もだいたい出ていた頃でしたので、寝具や食料にも余裕があり、外から突然やってきた私たちにも食料や寝床を提供してくれました。

したがって、私たちの活動は、外部のボランティアによる支援というより、「被災者と部外者による共同生活」と表現したほうがしっ

くりくるのかもしれませんが。私たちは、なるべく避難所の方々と同じ生活をするように心がけ、

無理やり頑張らず、暇なときは、周りと同じようにテレビを見たり、マンガを読んだり、仮眠をとったりしました。そのかいあってか、避難所の方々と自然に溶け込むことができ、最終的には友達のような関係になりました。

同じペースで生活を送ることによって、多くの方々と自然にコミュニケーションをとることができました。テレビをみながらご年配の方と、洗い物をしながら奥様方と、夜更かしをしながら若者たちと、心をうちとけておしゃべりができたように思います。

子どもたちにお兄さんお姉さんを

避難所の子どもたちへのケアについて感じたことをお伝えしたいと思います。結論から申しますと、①避難生活は子どもたちにとってはストレスのたまりやすい環境であり、②その心身のケアをする上で、「ナナメの関係」が有効的である、ということです。

言うまでもなく、避難所は多くの人による集団生活です。保護者が、自分の子どもが周りに迷惑をかけないように、きつく叱る場面も見受けられました。その場にふさわしい行動をとることは大切ですが、それだけでは子どもたちの息が詰まるのが容易に想像できます。また、通常の生活とは異なる集団生活では、誰しもそれだけでストレスが生じます。大きな地震を体験した恐怖感も残っていることでしょう。

あるお母さんは、次のように話してくれました。

「普段はそんなことはありませんが、夜ひとりでトイレにいけなくなっています。目が覚めることも増えています」

私たちは子どもたちの心身のケアをすることを目的にこの避難所に来ましたが、そのためには、思いっきり遊んで、勉強すること、そして、その相手をしてくれる人がいることが効果的である、との結論を得ました。どれも日常では当たり前のことですが、その当たり前の環境を作ることが大切である、ということが分かりました。それを理解していたからこそ、町の方々は学習室をしっかりと設けたのだと思います。

学習の時間、私たちは、子どもが解いた問題の答え合わせをしたり、分からないこと、間違った箇所を教えたりしました。子どもが取り組んだことをしっかりと受け止め、それにリアクションを返すことで、次の学習へと繋がる、ということを感じました。

例えば、「この時間で〇ページまで解いてみよう」、「次はこの問題を解いてみよう」などと語りかけ、子どもたちと一緒に目標を立てたりもしました。そんな言葉のキャッチボールの相手はやはり必要です（特に小学校低学年）。

遊びの時間（学習、睡眠、食事の時間以外すべて）には、私たちは何でもやりました。だっこ、おんぶ、肩車、サンドバック（キック、パンチを浴びせられる）はエンドレスで

続きます。サッカーにキャッチボール、ブランコ…。黙して隣でマンガを読んでいるだけの時もあったり、こちらの携帯電話で写メを撮られたりもしました。正直疲れましたが、すべて、いつも「てらこや」でやっていることなので、全く苦痛ではありませんでした。むしろ、歓待してもらえて嬉しくもありました。

子どもたちにとって身近なお兄さんお姉さんだと感じられる、大学生・若者には、子どもたちのありのままの感情を引き出す「見えない力」があります。普段の「てらこや」活動で幾度となく実感してきたことですが、ストレスの溜まりやすい避難所の生活においては特に、子どもたちの「ありのまま」を受け止められる大学生の役割は想像以上に大きい、と実感しました。

共に思いっきり遊び、学ぶことを続けると、関係が深まってきます。共同生活3日目のことですが、子どもに「遊ぼう！」と言われ、「洗いの仕事があるから後でね」と答えたら「僕も手伝う」と言って、何名かの子どもが洗いを率先して手伝ってくれました。しかも、一回きりではなく、翌日も自らやってきてくれました。お湯も出ない中での300名分の洗いは決して楽ではありませんが、その作業を楽しく生き生きとやってのける姿に感動しました。

さらには、「明日は一緒にトイレ掃除やろう！朝〇時にここに集合ね」と言い出し、実際に、翌朝一緒にトイレ掃除をやりました。このような共同生活を続けていたので、お別

れのときは、泣きながら引きとめたり、車を追いかけてきてくれました。親しんだお兄さんと一緒にいることによって、普段なら何でもないような、勉強、遊び、お手伝いをするのが、楽しくてしかたなかったのだと思います。

このように、避難所でストレスの溜まりやすい生活を送っている子どもたちにとって、親でもなく、教師でもない、そして友達とは違った存在で、自分のことをありのままに受け止めてくれるお兄さんお姉さんのような存在である大学生が重要な役割を果たしているのだと思います。もちろん、私たち自身もこのような子どもたちと出会い、受け入れてもらえて、大いなる喜びと少しの寂しさを感じることができました。子どもたちに心から感謝しています。

今後の活動

旧春山小学校で避難生活を送っていたほとんど全ての人たちは、会津若松の東山温泉の旅館で生活を送っています。やっと家族だけの個室での生活が出来てホッとしていることと思います。ただ一つ残念なのは、諸事情により「学習室」が閉室されてしまっている、ということです。また、一緒に遊んだ子どもたちが少し離れてしまったため、以前のように集団で遊びにくくなっているそうです。

連絡先を教えた子どもから、「明日遊びに来れる？」との電話がありました。残念ながら私はすぐには行けませんが、春山小学校と一緒にいった学生（何と、実家が会津若松市と

いう偶然!)が翌日から遊びに行ってくれて
います。その学生曰く、「ここでは、より一層
学生の力が必要です!」とのことでした。「て
らこや」として、一刻も早く、子どものケア
をする学生を派遣できるよう、努めてまい
ります。

ちなみに、私は現在学生ではありません。
(元学生です。)今回の避難所では、学生にな
りきって子どもたちと向き合ってきましたの
で、その視点からご報告させて頂きました。



福島の子どもたちと共に

<御礼>

今回、この活動を行うにあたり、多くの方々のご協力を
頂きました。

電気アシスト自転車を寄付して下さった方、物資運搬、
移動の軽トラックを貸して下さった会社の方、移動にかか
るガソリン代を寄付して下さったNPO法人さま、共同生
活を受け入れて下さった大熊町の職員の方、いろいろアド
バイスを下さった大熊町の町議会議員さん、消防団の皆さ
まお話を聞かせて下さった、町民の皆さま。

大きな支えとなって下さった復興支援ネットワークの
鎌倉の皆さま、様々な物資や応援メッセージを寄せて頂い
た、全国の「てらこや」の有志、留守を守って下さった「鎌
倉てらこや」の皆さま、大切なことにあらためて気づかせ
てくれた子どもたち。

その他、陰ながら応援して下さいました皆様に、心から御礼申
上げます。

感謝

一東北に復興支援便を届ける

NPO 法人全国てらこやネットワーク前理事長
湯澤 大地

「なぜそんなに一生懸命やっているのです
か?」と聞かれる時がある。そんな時、大し
て一生懸命やっている自覚は無いので返答に
困る。多分、復興支援の報告をホームページ
等に、こまめにアップしているので過大に評
価頂いているのだと思う。最近「暇なんで
す」で答えるようにしているが、たまに真に
受ける方もいて、褒められるという事は難し
いものだと感じている。

東日本大震災の復興支援に携わってきたこ
の9ヶ月間、様々な事があった。3月23日、
初めて被災地入りした時の感覚は強烈なもの
だった。その時の風景と匂いは忘れることは
無いだろう。

少し大袈裟な物言いになるが、最近、私たちは時代に試されているのではないかと考えるようになった。当然、「時代」というものに意識がある訳でなく、結果的に評価を下されるという意味だ。この2011年は将来、教科書の1ページになっていくだろう。そして、この時代に生きていた私たちがどのように行動し、どのような結果になったか、後世の人たちが判断し、評価を下すことになる。その時に私は、復興に携わったほんの一部にでもなれば良いかなと漠然と考えている。

この震災により、私は自分が多くの先入観に捉われていたことを知った。現在の社会構造や価値観が表層的なものであることを忘れていた。表層的であるのは、何時の時代も同じようなものだが、そのことを知っている否かが大切なのだと思う。

被災地に行くことだけが支援では無いし、早く行くことだけに価値がある訳でもない。出来ることを出来る範囲で行う事が大切なのだろうし、正解は一つではない。ただ一つ、「忘れないでいることが大切」であることは忘れないでいようと思う。

私は1995年の阪神淡路の時、4日間だけボランティアで現地入りした。その時の経験から、3月11日の発災時、直ぐに支援物資輸送などの準備をしないと緊急対応は出来ないと考えていた。その反面、無計画に被災地入りすることは現地の迷惑になることも経験していたので、現地状況の調査を開始することにした。

少し初期対応が遅かったが、3月15日に、

「NPO 法人全国てらこやネットワーク」でミーティングを開催し、組織として復興支援を開始すること、緊急時の判断の一任という二つの了承を頂いた。16日から支援計画の策定、車両手配、現地ニーズの把握などの準備を開始、18日には松尾崇 鎌倉市長に協力を仰ぎ、鎌倉市民の皆様から支援物資募集を開始した。その後直ぐに福島県から救援物資搬送の依頼が有り、3月23日～24日にかけて福島県田村市に搬送した。これがてらネット復興支援第1便となった。その後、宮城県石巻市から依頼が有り、3月27日に第2便、3月28日～4月2日まで福島県の避難所へ第3便を運行し、私たちの復興支援便は2012年1月現在、第45便を数えるまでになった。

復興支援内容は、この9ヶ月で変遷していった。当初の食料や燃料などの緊急物資から、生活に関わる支援物資搬送に、その後は、炊き出しなどのインフラ復旧までの支援から、瓦礫撤去などの生活基盤復旧の支援に変遷していった。

この「変遷」は阪神淡路震災時の経験が有り、現地のニーズに少しだけ先行して準備することが出来た。他団体の支援との重複せずに、現地からの依頼に即応した支援が出来たのではないかと判断している。

申し上げる迄もなく、今回の震災は想定以上の広範囲にわたるものだった。私たちが行ってきた支援が如何に微々たるものか、そして自分が如何に無力であるかを痛感する時が何度もあった。しかし個人としての自分は無力であっても、組織や個人の善意を集めるこ

とにより、少しは役に立ったかなと感じる時もあった。

行政は公平性の観点から、マスでの支援が大前提になる。極論すると、100人の避難所に50個のオニギリを届けても配布することが出来ない。しかし、この事で行政を批判することは出来ない。発災直後の現地は混乱した状況で、行政側の方々が苦渋の決断をする場面を何度も見聞きした。反面、私たち民間は公平性に縛られることなく、即応性と実効性に特化して活動でき、私たちの「役目」もそこにある。

結果的に行政と実効的な連携が取れたのは、被災地の友人たちのお陰であった。支援をしているのかされているのかわからず、反省する場面も多々あった。

私共の復興支援便は、多くの方々のご協力に支えられ、大きな事故もなく45便を運行することが出来た。様々な方々が、率先して復興支援事業に参加して下さり、少しは被災地の役に立ったのかもしれないと感じている。この場をお借りして、関係者の皆様に感謝申し上げます。

被災地の為にと行ってきた復興支援は結局、自分の為になった。「機会を頂ける」という事は本当にありがたいものだ。私は現在、複数の継続性を担保した復興支援事業に携わらせて頂いていて、2012年もより気楽に復興支援を続けて行こうと考えている。それはまだ始まったばかりだ。

